とうへいぉ だ 藤平小田遺跡

(熊毛郡南種子町大字島間字藤平小田)

位置と環境

遺跡は,西海岸から直線距離にして約400m内陸部で,中種子町境からは約500mの距離に位置する標高50m前後の台地上にある(第1図)。

調査の経緯

畑地帯総合整備事業(緊急整備型)の実施に伴い, 町教育委員会が調査主体となり,鹿児島県教育委員 会の協力を得て発掘調査を実施した。

平成8年度に確認調査,平成9年度に発掘調査 (約2,700㎡) を実施し,縄文時代前期・中期・後期 と中世の遺構・遺物が確認された。

遺構と遺物

縄文時代では、配石遺構65基、大型配石土坑1基、 大型土坑4基、集石3基、集積1基が検出された。 中世では、掘立柱建物跡4基、溝状遺構1条が検出 された。

配石遺構は、縄文時代後期のものと思われ、半弧状に65基が検出された。2列に並んでいる感もあるが整然さに欠ける部分も多い。形態は、石皿を「ハ」の字状に組み合わせるもの、舟形状もしくは「コ」の字状に組み合わせるもの、不規則なものなどに大きく分類された。構成される礫は、殆どが磨石・石皿類であった。石皿に関しては、完形品もあれば欠損品もあり、使用により窪みの顕著なもの、窪みを内側に向けて立っているものも見られた。

大型土坑は,いずれも配石遺構の円弧内にあり, 断面はすり鉢状を呈していた。床面には柱穴があり, 何らかの構造物があったものと推察される。

大型配石土坑は、前記の大型土坑とほぼ同じ形状であるが、上部に超大型の砂岩製石皿が円状に配置されていた。これらの土坑内から出土した多量の縄文時代後期の土器の中には、装飾付壺形土器や台付皿形土器も出土した。

集石は、砂岩の円礫を用いた直径約2mのものが 検出された。また、直径約3mで約50cmの掘り込み をもつ大型集石は、カーボンの堆積が特に著しかっ た。掘り込み内は、赤化し非常に脆くなった礫で埋 め尽くされていた。



第1図 藤原小田遺跡の位置

膨大な土器・石器が出土した。土器は、市来式土器を中心に丸尾式土器・納曽式土器・一湊式土器などが出土している。中でも、最も遺物量・バリエーションが豊富なものが市来式土器と納曽式土器である。特に、市来式土器の文様構成の装飾付壺形土器がまとまって出土したことは、この種の様相を知る良好な資料となった。また、これまで類例の知られていないタイプの土器がまとまって出土した。全体の器形や文様構成から納曽式土器・一湊式土器・丸尾式土器の影響を受けると思えるものであり、三者の関係を解明する資料となった。

石器は、磨石・敲石・石皿類が圧倒的に多く数千点以上出土している。この中には、種子島では産出しない花崗岩製のものも見られる。次に、石斧の出土も多い。粗雑な作りで、約30cmもある砂岩製の打製石斧も見られた。また、硬質砂岩製の礫器も多い。但し、狩猟具となる石器は、極めて少なかった。

特徴

南九州にあってこの遺跡の成果はほかに類例がなく極めて特殊な遺跡である。特に,配石遺構は,東日本で見られるような配石遺構とは地理的にも文化的にもかけ離れており,切り離して考えざるを得ない。

資料の所在

出土遺物は、南種子町郷土館に展示され、一部は 南種子町教育委員会に保管されている。

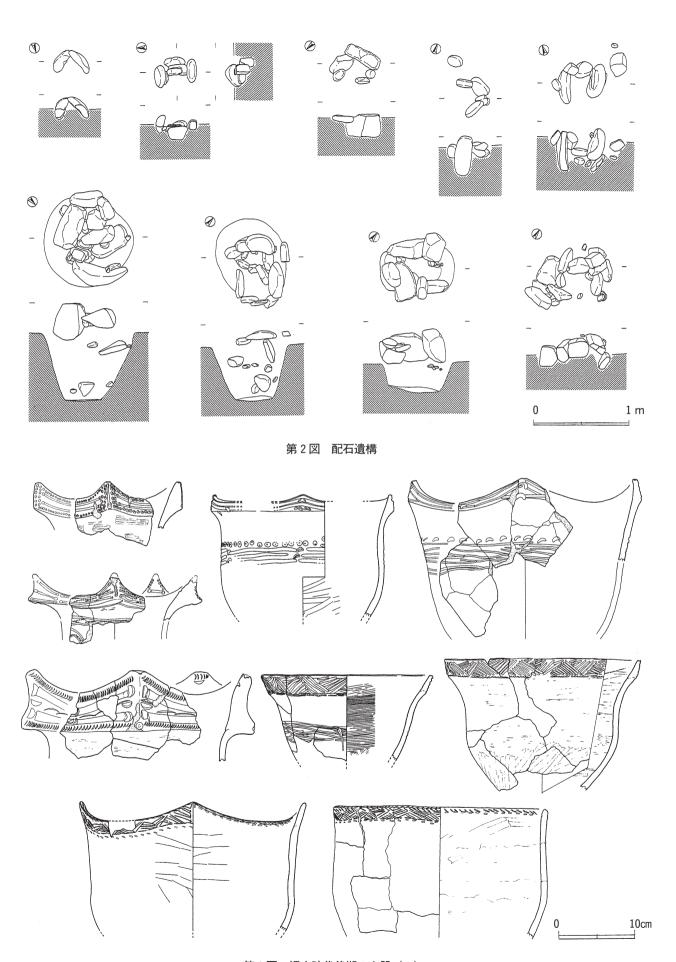
参考文献

南種子町教育委員会2002「藤平小田遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』 9

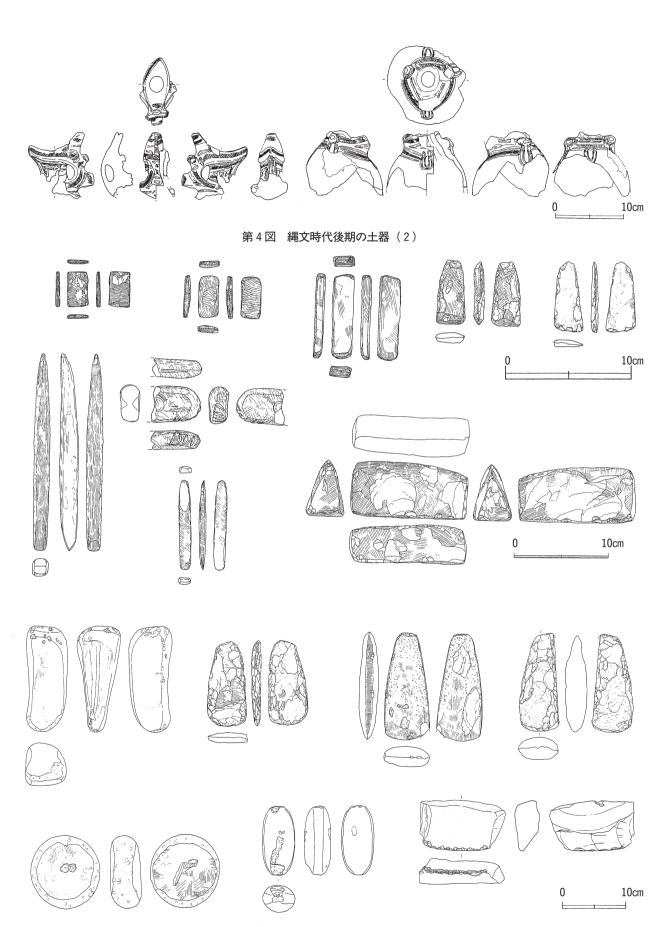
(坂口浩一)



写真 1 藤平小田遺跡 航空写真



第3図 縄文時代後期の土器(1)



第5図 縄文時代後期の石器